

sometimes cure,  
always comfortable

# 広報 いちいの杜

## 平成30年度 いちいの杜 施設目標

スローガン ” 地域包括ケアシステムと連携を密にし、  
超強化型老健としての役割を担っていく。 ”

- 1 R-4システムを活用して業務の効率化を高めていく。
- 2 生活リハビリに沿った日常介護の実践。
- 3 デイケアでの生活リハビリの継続と在宅療養の質の向上。
- 4 地域包括支援センターとの連携強化。

### 巻頭言

理事長 金光 弘

今年の4月から老健いちいの杜は超強化型老健として新たなスタートを切った。在宅復帰を重点的に行っていく事には何等変わりはなく、今までどうり6、7割の入所者が家へ帰っている。家へ帰った高齢者は例外なく穏やかで満ち足りた表情を浮かべ、施設では見せたことのない笑顔で迎えてくれる。こんな姿を施設の若い介護者に見せたら日々の業務のモチベーションがどんなにか上がることだろう。「2025年をピークに高齢者が増え続け、特養や老健などへ入所することが益々難しくなってくる。だから、なるべく在宅で療養したり、看取ってもらうように」という話しをよく聞く。こんな乱暴な話しがどこから出てきたのだろうか。高齢者が皆、要介護状態となって施設に收容されるのならば絶対数として足りないことは判る。そうならないように30年前からオレンジプランが作成され、市町村単位で様々な施策が行われているし、やむなく要介護状態になっても十分とは言い難いが、様々な介護サービスが受けられるシステムが出来上がっているのである。そのなかに在宅療養という選択肢もあるという事を多くの人に知って欲しい。いちいの杜は1人でも多くの高齢者を在宅に復帰させる努力をしているが、その後の在宅療養が円滑に行われるよう、訪問診療や訪問看護などのサービスを導入している。住み慣れた自宅で1日でも長く療養してもらえ環境作りに、家族と共に邁進していかねばならない。益々、居宅支援事業所のケアマネージャーや地域包括との連携が不可欠となってきている。

### 超在宅強化型老健となって3ヶ月余り・・・

施設長 浜田 篤

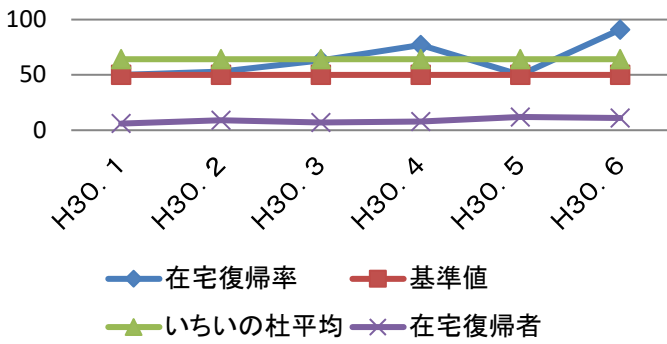
「超在宅強化型」老健の適用を受けてから3ヶ月余りが経ちました。この3ヶ月の印象ですが・・・正直、それ以前と特に変わったことはありません。忙しいのは相変わらずですが、目指していることも悩んでいることも、今までとそれほど変化はありませんでした。いちいの杜では今日まで、「我々の持っている能力や提供しているサービスの質を高めて、可能な限り効果的に社会貢献できる」ことを追及し続けてきました。その結果として、早い段階から利用者の在宅復帰に力を入れ、在宅復帰した方の在宅生活を支え、利用者の家族の方々とも密に連携を図ってきました。これからもその姿勢は変わることはないでしょう。何故ならば、我々はこれまで既にやってきたことの成果を、毎日の業務の中で見ているからです。

### 超在宅強化型老健としての3ヶ月

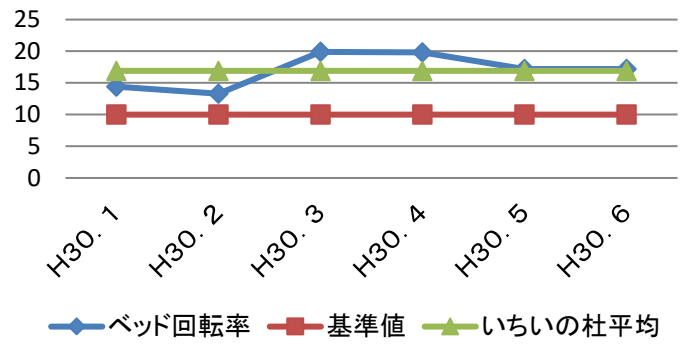
理事 飯塚 和子

老健本来の目的である在宅療養を支援する施設として創設されたいちいの杜は、超在宅強化型老健になってもその理念は変わる事はない。治療の必要性から長期臥床、抑制などで入院生活を余儀なくされた利用者は、いちいの杜でそれらの縛りを心身共に解かれるまで、当然のことながら時間を要する。それから超在宅強化型老健の要件を満たすべく個別的なかかわりが始まる。入所前後訪問が行われ具体的な支援計画が立案され実施される。以前にも増してあわただしく時間が足りないと感じる。しかし退所前訪問が行われ、家に帰る事が決まると利用者様の表情が明るくりハビリにも力が入る。みんな家に帰りたいんだ！と実感する。在宅で介護にあたる家族を支える事の難しさも痛感しているところであり今後の課題でもある。多職種が連携し協働して利用者の望みを叶えていきたいものである。

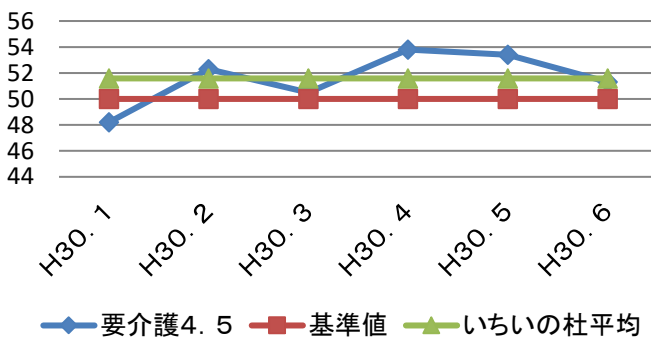
## 在宅復帰率(%)



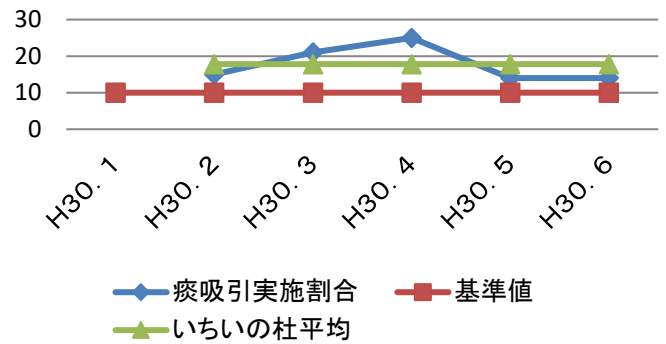
## ベッド回転率(%)



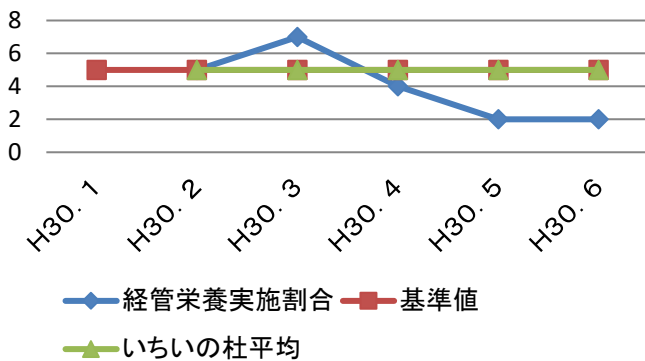
## 要介護4・5割合(%)



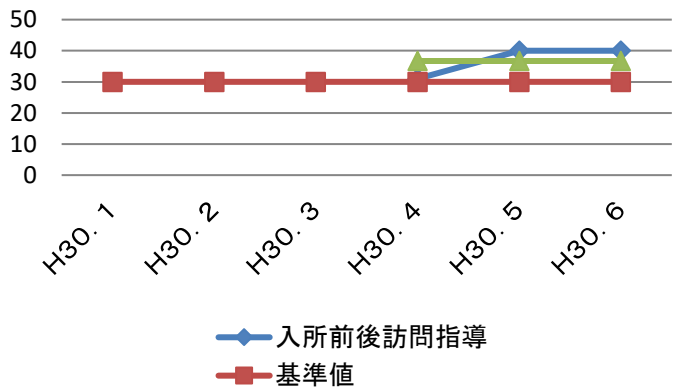
## 痰吸引実施割合(%)



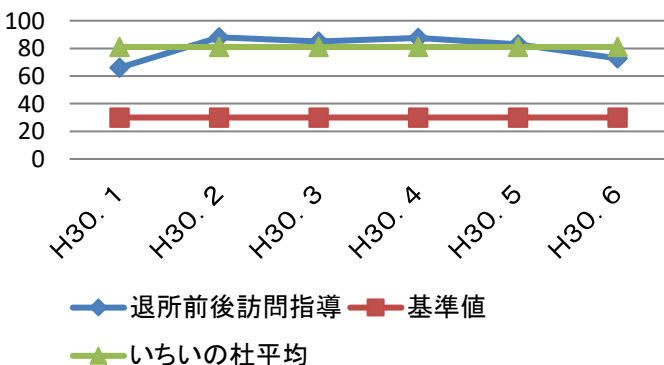
## 経管栄養実施割合(%)



## 入所前後訪問指導実施割合(%)

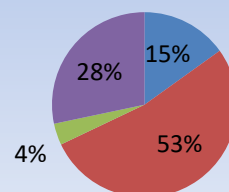


## 退所前後訪問指導実施割合(%)



## 在宅復帰者の在宅期間

- 1ヶ月未満
- 1ヶ月(2週間)以上
- 2ヶ月以上
- 3ヶ月以上



## 超在宅強化型老健となつての3ヶ月



今回の介護報酬改訂で強化型老健から超強化型老健になり、相談部も2名体制から4名体制となりました。また、いちいの杜は以前から経管栄養、尿カテーテル、痰吸引、難病の利用者も入所を受けてきました。今回、超在宅強化型老健の在宅復帰・在宅療養支援等指標に、痰吸引と経管栄養の実施割合で加点されることとなり、これまでやってきたことが評価されたと感じています。と同時に、入所前後訪問(入所前1か月＋入所後1週間で自宅訪問)や退所前後訪問(退所前後30日以内で自宅訪問)も、努力目標(実施すれば加算)だったところから実施することが前提となり、外に出て行く回数が多くなっています。これまでご家族に写真を撮ってきて頂いたりしていましたが、実際にご自宅を訪問すると、入院に至る前の生活状況などが理解でき、より本人に即したプランニングができるようになりました。在宅での生活が続けられるように支援していきます。

相談部部长 白田 悦子

## 超在宅強化型老健となつての3ヶ月



今年度より看護主任を拝命し、主に2階の利用者様を担当させていただいている。退所が決定してからの会議、サマリーや指導書の書類作成など、現場を離れる時間が多くなった。会議の簡素化や人員の増員・定着により、利用者様と直接関わる時間を増やしていきたい。高齢者の排便コントロールは難しく、便失禁や弄便行為は介護負担が増してしまうため、下剤の調整は慎重に行わなければならない。在宅でも継続出来るものを検討していく必要があり、訪問看護との情報交換が重要である。利用者様が安全安楽な在宅生活を過ごせるように、多職種との「ほうれんそう(報告・連絡・相談)」を大事にしていきたい。

看護部部长 高橋 陽子

## 超在宅強化型老健となつての3ヶ月



超在宅強化型老健として継続できているのも、ご利用されるご本人様、ご家族様、地域の事業所の皆様のご理解、ご協力あつてのことだと思ひます。この場を借りて御礼申し上げます。

超強化型老健の認定を受け、今日までを振り返ってみても、ベッドコントロールが一番の課題だと感じます。安心して在宅生活を送っていただくためにも、緊急時受け入れ用のベッド確保は必要不可欠です。我々もそれを見越して入所や退所の予定を立て、準備しておりますが、今回のような災害級の猛暑による緊急入所の受け入れや、体調不良によるベッド移動など、予定通りとは行かない事が多くあるのが現状です。ご入居中の皆様にもご理解とご協力を頂きながら、ベッドコントロールをさせて頂いています。今後も限られたベッド数で男女問わず、スムーズな受け入れをしていかななくてはなりません。これからもご理解、ご協力を引き続きよろしくお願い致します。

介護部部长 原 彰宏

# 超在宅強化型老健としての3ヶ月



リハビリテーション部部长 徳岡 美鈴

今年度から超在宅強化型老健としてスタートして3ヶ月が経ちました。リハビリテーション部でも、入所した利用者様を元気にして家へ帰す、という大きな流れは昨年度までと違いはありません。具体的には、入所後訪問指導の実施により利用者様の家屋や周辺環境、介護する家族を実際に確認することで、目標設定や退所までしておくことが明確になりました。また、2、3、4、各階に作業療法士、OTを配置することになり、フロアーリハビリや生活リハビリをさらに強化できるよう現在取り組んでいるところです。



栄養課部長 高木 美樹

いよいよ本格的な夏へと突入です。超在宅強化型老健移行後も利用者の皆様は在宅復帰に向けて日々リハビリに励まれています。夏の暑い時期は食欲がわかないこともあります。しっかりと栄養、水分補給をして、リハビリに取り組める基礎体力の維持を図っていきたく思っております。そのためにも、引き続き献立の工夫や個々に対して食べやすい形状、提供量などを検討し、暑さに負けず元気に在宅へ復帰できるよう支援してまいります。



事務長 川田 隆広

今までも超在宅強化型老健移行後も、事務は現場が動きやすいようにサポートすることが主な役割です。コミュニケーションは話し手が話すべき時に行うものではなく、話し手が、聞き手の様子を伺い、聞ける状態であることを確認して初めてコミュニケーションが成立するものであることを意識して、現場の皆様と関わるようにして参ります。

## 納涼祭

今年も納涼祭の季節がやってまいりました。皆さまが楽しい時間を過ごせるよう、職員一同準備を進めています。当日はご家族の皆さまのご協力とご参加をお待ちしています。

**平成30年8月18日(土)**  
**14:00~16:30**



昭島鳳凰太鼓  
お神輿・盆踊り  
各種模擬店



## 新入職員紹介

新たに以下の職員が仲間に加わりました。どうぞよろしくお願いいたします。

リハビリ部

相談部



小岩 竜太郎



見留 博紀